

10月16日 マルコによる福音書 15章 21～41節 今日の説教から

説教題：「十字架の前に至って」

本日は10月10日の、江刺教会のお誕生日、創立記念を祝う礼拝であります。1955年10月10日、今から数えて77年前に江刺教会の前身となる、江刺伝道所の開設が日本基督教団によって同意されました。始めは兼務で水沢教会の牧師であった菅隆志先生が、その次はのちに一関教会との兼務によって伝道所時代を支えてくれた深瀬忠先生が、そして現在の江刺教会としては初代の牧師となる、佐藤駿一郎先生がこの伝道所を江刺教会へと育て上げていきました。

私たち江刺教会の根源をたどった最初の一步、キリスト教教会の最初の一步はどこであったと考えればいいのでしょうか。もちろんそれはキリスト教の教会誕生の瞬間である「ペンテコステ」における聖霊降臨の瞬間であり、イエス様が十字架から復活して弟子たちの前に現れた再会の瞬間でもあるでしょう。ただ、それだけではなく、今日の聖書箇所に記載されているイエス様の十字架、全く罪がないイエス様が十字架上で死を遂げたその瞬間も、私たち教会の始まりの瞬間であったと言えると思います。

今日の聖書箇所では、ゴルゴタの丘へと向かう途中、過酷な尋問に体力を削られていたイエス様のために十字架をかついだ「キレネ人のシモン」という人物が出てきます。何のいわれもないのに十字架を背負い、そしてその十字架につくイエス様を見上げた時、シモンはどのような気持ちでイエス様のことを見つめていたのでしょうか。

証言は、「一人の証人によって立証されることはない。二人ないし三人の証人の証言によって、その事は立証されねばならない」と申命記19章には定められております。パウロも、コリントの信徒への手紙Ⅱ13章において、「すべてのことは、二人ないし三人の証人の口によって確定されるべきです」と断言しています。ここで、今日の聖書箇所でも語られている「本当に、この人は神の子だった」という証言が、百人隊長ただ一人の言葉であれば、それは確かな証言ではなくただの百人隊長の個人的な意見としか受け取られません。しかし、もしこのシモンが、十字架につくイエス様を見て、そしてののしられても十字架から逃げないイエス様を見て、「この方は私のために十字架についているのか」と気づいたのであれば、彼もまた百人隊長と同じくイエス様を神の子と証言する一人となったことでしょう。そうであれば、ここに私たちの教会の創立の瞬間が、イエス様を神の子であると証しする群れの最初の二人が生まれていたのではないのでしょうか。

この歴史が、今この時代において、この江刺の地において、時と場所を飛び越えて確かに私たちともつながっているのです。江刺教会創立からの歴史が、今を生きる私たちにつながっているように、今を生きる私たちの歴史は、10年後、20年後、50年後、100年後の江刺教会へと繋がっていきます。形は違ったとしても、世代を経て担う人が変わっていくとしても、この地にまかれた信仰の種は、決して枯れることなくこの地で育ち続けるのです。私たちは、その業のお手伝いを、それぞれの賜物によって今この時も続けていくのです。

クリスマスの喜びを多くの方と分かち合うために、江刺保育園の子どもたちや、保護者の方々、地域の方々とその喜びを分かち合うために、これから始まる準備の日々を共に進めていきたいと思います。

今日の説教箇所：マルコによる福音書 15 章 21～41 節

- 21:そこへ、が、田舎から出て来て通りかかったのも、兵士たちはイエスの十字架を無理に担がせた。そして、イエスをゴルゴタという所——その意味は「されこうべの場所」——に連れて行った。没薬を混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはお受けにならなかった。それから、兵士たちはイエスを十字架につけて、／その服を分け合った、／だれが何を取るかをくじ引きで決めてから。イエスを十字架につけたのは、午前九時であった。罪状書きには、「ユダヤ人の王」と書いてあった。また、イエスと一緒に二人の強盗を、一人は右にもう一人は左に、十字架につけた。そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。「おやおや、神殿を打ち倒し、三日で建てる者、十字架から降りて自分を救ってみろ。」同じように、祭司長たちも律法学者たちと一緒にあって、代わる代わるイエスを侮辱して言った。「他人は救ったのに、自分は救えない。メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう。」一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。
- 33:昼の十二時になると、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。そばに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「そら、エリヤを呼んでいる」と言う者がいた。ある者が走り寄り、海綿に酸いぶどう酒を含ませて葦の棒に付け、「待て、エリヤが彼を降ろしに来るかどうか、見ていよう」と言いながら、イエスに飲ませようとした。しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた。すると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言った。また、婦人たちも遠くから見守っていた。その中には、マグダラのマリア、小ヤコブとヨセの母マリア、そしてサロメがいた。この婦人たちは、イエスがガリラヤにおられたとき、イエスに従って来て世話をしていた人々である。なおそのほかにも、イエスと共にエルサレムへ上って来た婦人たちが大勢いた。